

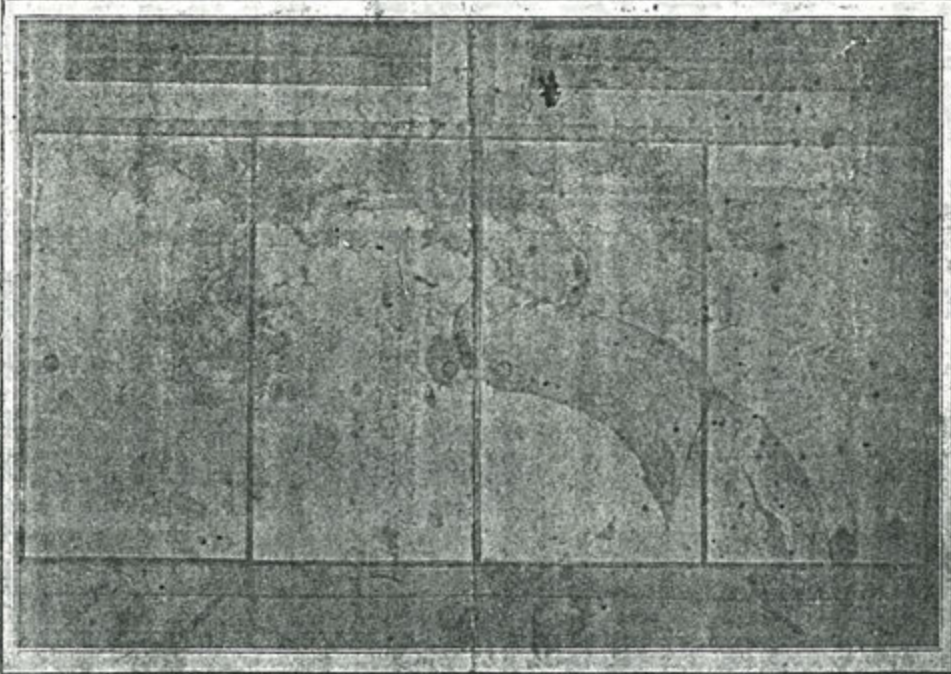
號年新一統年二廿第



(號五十七百二第)

本年の御勅題は海邊松なり。然るに客年臘月淺草區慶印寺改築成り予寺主青村師の囑に従ひ其襖の全部に拙筆を撫したるが中に松樹の一幹は亦御題に因みありしを以て此に掲ぐることはなしぬ

松尾鼓城



所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發

三三五三三京東座口替振

聞法と思惟
△自慶會の創立 松尾鼓城
△日蓮主義ニコノ 成島龍北
法學博士 山田三郎

新年の年頭に當りて純圓一實の正義を奨む 大僧正 本多日生
日蓮聖人教義綱要(第五回) 僧正 井村日成

日蓮聖人春初御消息

「春の初の御悦び木に花のさくか如く、山に草の生ひ出るが如しと、我も人も悦び入て候」

「正月の一日の日の始、月の始、年の始、春の初、此をもてなす人は月の西より東をさしてみつるが如く、日の東より西へわたりて明かなるが如く徳もまさり人にも愛せられ候也」

「正月の始に法華經を供養しまいらせんとをぼしめず御心は木より花のさき、池より蓮のつぼみ、雪山の旂檀のひらけ月の始めて出るなるべし」

「先づ五節供の次第を案ずるに妙法華經の五字の次第の祭なり、正月は妙の一字の祭り……此の如く心得て南無妙法蓮華經と唱へさせ給へ、現世安穩後生善處疑ひなかるべし」

△統一閣廣告

○十六日 例年の通り労働者
慰安會
○十九日 日蓮主義青年會
初會午後六時より

日宗法衣專門

恭賀新年

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北
振替口座 大阪四貳五九

定價表は御申越次第
何時までも御送申上候



●位牌木魚卸小賣

●御來店之節ハ陳列場へ御來車被下度是迄ハ一層勉強仕リ
●佛具一切陳列仕置候●

賀正



各本山御用達
佛像佛具
一切卸小賣

定價表郵税四錢

小賣部 京都三條小橋東入南側
三法堂佛具陳列場

長距離電話中貳七八番
振替口座 東京貳〇七番
大阪四貳五九

卸部 京都市三條通小橋西入
本舖 三法堂 藤田總治

自慶會の創立 労働者に對する福音

労働者の慰安と善導とを目的として自慶會は發起された。

「時代の進運に伴ふて労働者を慰安し且つ之を善導すべき必要は益迫れるものあるを觀る、故に適當なる機關を組織し、此の目的の達成に盡すは蓋し健全なる文明を擁護する所以の事業たるべきを信じ、同志胥謀りて茲に本會を創立せり、本會は時々慰安向上の會合を開き、又は他の希望に應じて、此の種の會合に便宜を與へ、清新なる娛樂の中に慰藉と向上とを期し、復訓話に因つて健全なる思想を涵養し、以て個人の徳性を啓發するは勿論、家庭社會國家天地に對して善良の人たるの素質を究備せしめ、苦樂得喪に處して進路を誤らず、次第に精神の愉快を増加して、終には自慶満足の生活に立たしめんとす、古語に曰く水能く船を載せ亦能く船を覆へすと、冀くは憂國慨世の志ある人人は此の趣旨を贊助し、以て充全なる効果を奏せしめよ、其事業經營の如きは會則に就て之を諒知せられんことを望む」

これは是れ、實に其の自慶會の趣意書である。我國に於て

は近年實業興起の結果として労働者なる大多數は尨大の勢力圏を作つて社會の一階級を占めて居る。而も將來國運の昌隆と共に益々その増大を來すことは疑を容れないことである。而して労働者は晩朝暮夜に至る身力を傾注して就職勤務するのであつて、其身體勞役に比較して精神上の享樂は少ない、否その享樂を要求して之を誤り益々不潔の惡溝に陥るものさへ多いのである。故に清潔にして和樂なる慰安機關を設け、之を以て彼等を此に導き清樂欣悅せしむるの善事たることに於て眼あるもの、疾に着手せなければならなかつたことである。殊に彼等をして慰安以上に精神的訓育を與ふべく平易にして簡明なる教門を開いて之を善導するのは最も緊要なる心あるもの、直に着目實行すべき要件であつたのである。記者が昨年中に於ける各面の労働者の同盟罷工数を調べて見たが、新聞紙上に現れたものだけでもザット二十幾件の多數であつた。其業職別は造船所紡績會社の如き大工場から活版所メリヤス工場の如き、又甚しきに至つては郵便配達夫に至つて居る。之れに就

ては種々なる止を得ざる實情の加はつて居るものもあるが、實は労働者に向つて適當なる精神上の指導を缺いて居るのが第一の原因になつて居る。我幼稚なる舊思想を有する一部の人は労働者と云へば別種のもの、やうに思ふ人もあるが、労働者は決して細民ではない最も國家素質の一要素として各々一つの職務に向つて執務すべく資格を具へた貴い人格者である。只之を執務の上のみに資格を認めて精神の洗練を興へない爲に誤つたる行動に陥るのである。我國では從來小農、又は小作人、小資本なる商人を以て労働者より勝れたる階級の如く認め居るものがあるが、今や工業は世界の國力、輕重を左右する實力要素であつて、其工業の體質の一たる労働者は最も貴重にして且つ却つて彼等に勝りたる階級者であらねばならぬ。只之をして訓育訓練の宜しきを得ると得ざるに因つて直に影響する所は大は國家の盛衰に小は個人の幸福に及ぶのである。自慶會が慰安の外に善導の一綱目を置いたのは大に目的の良しきを得て居るのである。殊に職業に勤勉し品性高く思想健全にして他の模範たる者に表彰の方法を採るのは最も奨励の宜しきを得たるものである。

それから一面に労働者に向つて至極の良導を致すと共に、其資本家に向つて常に同情を労働者の上に對はしむること

は、雇主被雇主の間に對して其圓滿なる握手の良手段にして、若し單に労働者のみを良導するも資本主の同情心を喚起せしむることなくば此に兩者の平調を失し其效果に疑ふべきものあるべく、故に自慶會は其第三條(ホ)の部に、上流者資本家をして健全なる文明を擁護すべき責任を自覺せしむべく盡さんとするは、其目的の遂行に於て間然するところなきものといふべきである。

今回我儼師本多日生師、先輩若野、小原、高橋、矢野、山田、松本、福田、小林、佐藤の名士諸氏が發起して起されたる自慶會は實に社會的清事業として我等の多年其設立を見んことを冀望せしものである。一記者の如きは爰に滿腔の誠意と大歡喜の情を表して謹んで其驥尾に附し自ら進んで本會の小使の一員として犬馬の勞を採らんことを誓言するのである。

本多師曰く 我等の自慶會の運動は國家的社會政策を援助せんとするものに外ならない。國家の恩惠の中に包まれて、労働者に歡悦を催さしめんとするのである。國家として限りなき社會政策を施されぬから我々有志に於て之を援助するのである。云々

新年の年頭に當りて純 圓一實の正義を獎む

本多 日生

左は一月六日統一閣に於て新年會を催せし際、團の總本多現下の席上演説である。本演説は別に速記者をして速記せしめしかども本誌編輯室の間に合はず、依て一記者が要領筆記したるものを此に出すとせり。勿論要領筆記なるに加へて時間切迫の實情上其校閲を併せりしを以て、其意味を間違へ或は言論者略したる多し、讀者之を恕し給へや。何れ速記は別に刊行することあるべし就て見給ふべし。(一記者)

あるが、要は大事なることとして、新らしく復活し、新らしく氣分に生き而して新らしく活動して行くことであらうと思ふ。

(一) 新年とは何ぞや

新年の挨拶を申し述べます。此催は本年始めて、萬事準備も不行届であり、時間其他の事も任せなかつたことは止を得なかつたことでありませう。

さて此新年を相集まつて祝するには大切なる意味がなければならぬ、新年の意味は古來學者等に於て種々に説明されて

而して今一つは支那日本等に於て行ふ

新年の氣分は實に清新にしてスガしく上に向つては一國の統治行はれ治國平天下を謳歌して國王の徳に悦服し、王民一致して歡悦祝福する事である。西洋は知らぬが彼のクリスマスの如きも祝福することはするが神聖にして清新、歡喜の情に於て確に我東洋の正月の氣分には及ばないやうに思ふ。

今や世界の思想界は急劇なる潮流ありて其革新の切迫しつゝあることが覺えられるのである。就ては今日は御挨拶に過ぎないつもりではあるが此の急潮の切

迫に促されて、一言申し述べておくべき所感があるので、二三十分間時間をいだけくことにする。

(二) 純圓一實の日本國

日蓮聖人は日本國を「純圓一實の國」と主張されて居らる。純とは雜に對した言葉、圓とは偏に對する言葉である、一實とは種々な方便や間違たものでなく頗るよく統一し充實したるものを指したるのである。立正安國論の結論に「汝早く信仰の寸心を改めて速に實業の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆佛國なり佛國其れ衰んや、十方は悉く實土なり實土何を壞んや」云々も則ち純圓一實の結果を指した理想的國家を申されたのである。立正安國といふ即ち正しきを立てるとは小さな分裂を誠めて人心の統一歸着を期することを示されたのである、方便權經を捨て、一實大乘の法華經に歸入せよと教えられたのである。何宗の寺號を改めて法華宗の寺號にするとかあつちの寺から此方の寺に檀家の名を換へるとかいふやうな小さな事でない、眞に活ける

純國一貫の理想的教旨を廣く國民一般に押し弘めることをいつたのである混雜せる思想に會入すべく大聲せられたるものが聖人の此の理想であつたのである。聖人當時の日本の思想界の重なることは佛敎徒の手に有たので乃ち佛敎各宗の全體に向つてこれ等警告を與へられたのであるが、若し今日の如く佛敎各宗以外に思想文明が發達して居たならば一層廣大に各面に批評の矢を向けられたに相違ない。吾々は則ち聖人の御意を受けついで行くものであるが、最早各宗の如きは聖人の矢面に倒壊されて其本質は亡んで終ふて居るものであつて、今日取るに足らざる片々たる思想の如き、彼の形骸のみ大を誇つて居る厭世主義の如き鎧袖に觸るゝにも足らぬのである。之は甚だ傲語するやうであるが、真に自分の信じて居るところである。

(三) 外來の惡思想を迎撃撲滅せよ

日蓮主義者が新らしく心づくべきこと

は、今や西洋の險惡なる思想、及び政治風俗等が各國より日本に網集し來つて居る。而して日本を武力を以て犯すべく先んじて精神を亡ぼさんとして居る。我々は軍備擴張に於て大戦争の後に來るべき國防の爲に盡さねばならぬが、夫れよりも先に無形の強敵として迫り來りつゝある偏形なる惡思想に對して、我健全なる國民思想を養成して之を迎撃撲滅せなければならぬのである。

(四) 世界思想界の動搖

文明は各國の長所を受け入れるのは勿論であるが、しかし總ての思想を受け入れるといふことは注意すべきである、私が書生の時に諸種の學科を學べるときに何れの書にも多くは異なる文明が立ち混る時は文明の進歩を致すものであるといふやうに記されてあつたが、ところが近來學者の研究の發表に依れば文明の交るの向上に資することもあり又墮落することもあつて居る、此の交ることによつて惡思想の混入には餘程注意せねばならぬといふは、善惡思想の交叉

様である。文章などで見ると如何にも立派なやうに見えるが、實は清きものではない、亞米利加にしる露西亞にしるこの思潮に制せられて唯實利主義唯物主義の傾向に流れて來て居る。又彼の社會主義といふ如きも賢く云つても結局はバシと黄金とを認め且つ主張するのみである、只パンと金の外には高尚なる思想を有て居らぬのである、又高い思想から云へば労働者の如き一方からは貴いけれども一面にはパンと金の要求である、此等が勢力を得て終へば偏形の助長となつて船て云へば片一方が無暗に重くなつて轉覆るのである。當に或國の如きは此傾向の爲にヒツクリかへらんとして居るのである。學者の中には今亞米利加が一時平和のやうでも彼の如く唯物主義現實本位で浮ツ調子で行つて居ては何時か大變な事が生じはせずやと云つたが或は然らんとある、或は悲惨なる前途は到らざるやと思はれるのである。私は爾く直覺される場合もあるのである。

(六) 專制に對して起りたる民主のみ

一方には民本主義とか民主主義とか種々の事を云ふ、甚しきに至つては怪からぬ事を云ふ、しかし斯る説は用ひられべき事ではないと思つて居ると、二十六年の連中は惡逆なる事をくわだてる等はず、つまり惡魔の乗つたものである、民主などといふことは我日本には誰も思ふものさへない筈と思つて居たが其れが現に在つたのである、而も其者等の考へは民主が最後の勝を得るものだと考へて居たのである。

一昨日も或人が曰ふには、或る小學校の教員が錢湯の中で、世界の大勢は民主である民本である、之が最後の勝利を受けるものだなど、平然と云つて居た、居蘇加減とは云ひながら實に怪しからんと憤慨されて居られたが屠蘇加減でなくとも斯んな事を云ふ者は澤山ある。遺憾ながら之は從來餘り我國の上下一般が思想界を輕視したより起つた誤である。元來民主主義の如きは獨裁專制の反撥

に就てはどうか惡の方が勝を占める。酒呑と交る、飲まぬ方は追々酒飲になるが飲む方は矢張飲む、連の紅白にしても一つ池に植えてをくと追々白い方が種になつて紅の方がおごる、菊にしても良種は劣へて劣品がはびこる、則ち交る時ははより多く短所を受け入れるのである。良い草は亡びて雜草のみのである、終には善きことは亡んで終ふかも知れない。今各國に於ては從來の組織に就て大破壊を試みつゝある、これ等の思想を其儘受け入れるに於ては我國と雖も亦亡ぶべき端緒を起さんにも限らぬのである。

(五) 危險期に切迫せる現實主義の國家

今の世界の有様を見ると不具同士が都合をして居るやうなものである。啞は盲目を罵り、盲目は聾を惡口するといふやうな有様である。偏癡同士が一方の弱點を指摘して居るやうなものである。十九世紀の中葉より最も現實主義の思想は熾烈を極め、一にも唯物、二にも唯物、其結果唯是利に走ると云ふやうな有

より來たものである、或は壓制して人民を見ること恰も敵の如くしたる事に對して、此獨裁專制暴虐無殘を惡しとし呪ふべきものとして起つたのが夫れである。今の露西亞の人民は專制の王室を倒して仇の首を取つたやうに思ふて居るが其れが即ち壓制に反抗して起つたものである、國に壓制なく、專制なく憲法運用の國に何の必要あつて偏癡なる主張を容るゝ要があらうか、露西亞の如きは多年惡んで居つた政府を倒した、それは兎に角銀行の行金を奪ふとか、各國から借りて居た債務を棒引するとか云ふやうなのは、恰も我東京に曾て電車に火を放つたやうなものである、多數の人間が寄り合つて群衆心理に依つて電車に火をつける、それも電車に何の罪があるか、それが爲に明日からは市民の交通をなくすることに於て公益に害を生ずるではないか、先づ露西亞の今の状態なども矢張りそんなものである。

(七) 多數必ずしも眞理にあらず

多數と云へば宜いことのやうに心得て居るやうであるが、多數は獨りの暴虐に對して之を制せんとして起つたものに過ぎない多數が眞理といふ所以を見出すことは出来ない、道にしたところで、多數がよいといふのなら佛教でも一代藏經七千餘卷に對して法華經は僅に入卷である又壽量品は法華經中の一品に過ぎぬ、孔子にしても其當時に於ては多數の人からは退けられて居た、凡そ多數が其聖賢なるを了解するには可なり永き年月を経過して居るのである、今日でも阿彌陀經を信するものと法華經を信するものと比較したら阿彌陀經を信する人が多し、多いから其方が偉いかと云へば左様ではない多數とか少數とか決るといふのは餽餽にしやうか蕎麥にしやうかといつて多數に決る位なものに過ぎぬ、俗に盲千人目あり千人といふ理の解らぬものが多いから其方に決るといふ理屈は立つまい、それは眞の事も愚人の多數には破壊されて終ふことになるではないか、民主とか多數とかを斯く攻撃せぬとしても萬全のものとは云はれぬと思ふ。佛蘭西は共和政

體になつて其の爲に良くなつた事もあつたであらうが、又弱く悪くなつた事實もある、亞米利加が今は平穩のやうだが永久に保證はしがたい今はまだ試験中と云つてもよい時代である。露西亞の如きも無鐵砲な事をやつて居るやうだが到るところで行つまつて居る何處がよいか。又今の人が多數政事には戦争がないやうに云ふが之は無定見の事である。亞米利加の大統領が民主と云ひながら遽に兵を作し船を製つて兵備を増して居る、流石ッイルソンは偉いものと見えて表裏を使つて居る、私は政治の事は解らぬが彼の大統領は人道の爲に戦ふといふが、其爲に我國でもウイルソン氏を拜むやうに云つたり思つたりする人があるが、しかし斯く心酔すべきであるか之は少くとも研究中に屬して居るといふべきであらうと云ふのは、其の宣言に、今回の戦争は民主國と君主國との戦争である、民主君主を亡ぼすか君主民主を亡ぼすかの戦ひであるといつて居るさへ怪しからぬこと、聯合軍の方に君主立憲の日本があることを眼中なく忘れたるが如く云ふは何事て

(八)正義を標目せよ

吾等の主張は正義にある、我一國建設の上に宿つて居る天祖以來の正義を遵守して一步も退かないことにある、正義の亡ぶるは人類の意義の亡ぶととてある。我等は人類の意義を亡ぼして何の詮かあるである。宜しく正義に殉じて殞るべきである、日蓮聖人は正法を弘むるが爲に首の座に座られて、其時に首切役人は新らしき弘法を止まり給へば貴僧の生命を助けまらせんと申したけれど正義に殉ずるをいさぎよしとして死を恐れ給はずりしは即ち此意味である。歐米人が何と云つても正義を標目に立てずして只少數多數を以て事を判せんとするのは間違である、鱗は多數の群をなし遊いて居る、鳥様の晩はゾロ／＼と何處に行くのか押され／＼歩いて居る、多數の意味合は這んなものであるとも云へる。

(九)結論

調子に融通無碍の力とならねばならぬ。今の西洋心醉者も此に眼醒めて此の東洋流の圓妙なる意味合義理を了解せなければならぬ、實に我國は純圓一貫の行はれる國である、故に隔歴不融の偏固より去つて益々正義と國光を顯さねばならぬ。我々は之を新らしき努力に竣つて大に活動せねばならぬと思ふ。

謹而弔 千家尊福男

大阪 山田秀太郎

西洋の思想は元來が純圓一貫といふわけに行かぬ、多くは偏形の發達である、宗教神にして一神と云へば賢いやらでも其れッさり融通の利かぬ神である、哲學の如き、未だ中實を得ずして絶へず變化し始終動いて居る、つまり中心を得ない者としか見えぬ、東洋は孔子にして釋尊が知られても、小目は少々間違つても大綱は變化するやうな事はない、それは純圓一貫の思想を採つて居るからである、又西洋では個人と云へば親も子も分らぬ只自分個人を立脚とする、國家よりも個人も互も個人、之を佛教で云へば四十二段の階級に拘束されて隔歴不融の法問位の處である、彼等の思想の偏長は女房が大切と云へば親も擲りかねぬ、隅田川の渡して舟が覆る女房を助けるか親を助けかと云へば我等は夫婦本位が主義だと云つて女房の方を抱へて親を見捨てるのである。我國の人間の中にも多數、民主、個人之等は世界的潮流であるから世界的潮流には従はねばならぬと云ふものがあるが、之れは編流の主義で理屈に合ふとは云へまい、之等を正義に厚

い日本人があまんして容れるといふのは何とした事か。民主、個人これ等の思想は詮ずればパンと金である、パンと金も入用ではあるがヨリ以上高遠の理想を忘却して劣慾のみを満足せしめんとするの獸類の様なものである。世界々々とも二もなく黒惡なる潮流にさそはれんとするは何だ、正義を外にして世界が何だ、憲法を以て治國太平を理想すると、多數を以て綱政治をするとか何れが勝るか未だ試験中である、只多數政治を最良の治法と前提するのは誤つて居る(此邊者)日蓮聖人は「かたきは多勢なり法王の一人は無勢なり(乃至)終に權教權門の聲を一人もなくせめをとして法王の家人となし」云々と申されて居る、日蓮主義者は少數にても恐れない主義團である、多數だからと云つて兜を脱ば助かるか知らぬが、助からなくてもよい少數でも正義を守つて殞れて後止むの心があつたらよいのである、吾人は偏固なる思想を逆退して水晶の如き思想を以て立ち君に對しては忠となり、それが直に親に對しては孝となり、子には愛となると云ふやうな

日蓮聖人教義綱要 (第五回)

井村日成

第一章 總論

第四節 經證

謹んで新春の御慶賀申納候、讀者各位の信念増進を祈り、不相變本編の御愛讀あらんことを希上候。

日蓮聖人の教義の大綱は前節に申上た如くであります。日蓮聖人の御教義が本佛世尊の經説の何れに準據せられて居るものであるかと云ふことを本節で申上げ様と存じます。凡そ佛教徒としては如何なる場合でも、其論議する處は佛陀の説き給ふ處に依據して居らねばならぬ。此は佛教徒の通格である。若し佛教徒にして佛陀の所説に違ふた議論をするならば、それは佛教徒ではない違教徒である。佛陀の教を信じ、之を祖述し弘通するが故に佛教徒であるから、若しも佛教徒にして佛陀の所説に違ふものあらば、城者にして城を破るものとして軍門の血祭り

をすべきものである。日蓮聖人は本佛釋尊に對して最も忠實なる教徒の一人である。末代教法紛亂の時に生誕し、邪正を糾明し曲直を判別し給ふの大使命を有し給ふ本化上行菩薩の自覺に立ち給へるもの、彼等佛教徒の名を冒しながら佛敎を破壊せる不逞の徒に對して法戰を宣言せるの大法將である。故に聖人の教義は徹頭徹尾釋尊の金口に依據して居るものである。然るに現代の日蓮教徒のあるものは、日蓮聖人を尊信するの餘り、殊更に貴からしめんと愚案よりして、偶々遺文中に「教主釋尊よりも大事の日蓮」なる一語あるを援用して、其所論の仔細を研究せずして、直ちに日蓮聖人は教主釋尊よりも貴しとの主張を爲すものあるも、斯の如きは畢竟最厲の引き倒しに過ぎざるものにして忠實なる聖人をして逆路の人たらしむるもので、聖人に對する大不孝のものとならねばならぬ。大に心を

して考へねば大事な事柄と思ふのであります。お話しは横道に外れましたが現在の教徒に對し見通すことの出来ない大事の點である故に申上た次第であります。印の證明法として三種あることを明して、左の三量の一に該當せねば論理上人をして肯定せしむるの價値の無い議論であると申して居ります。

現量 現在の事實に基きて證明せるもの

比量 推理上斯くあるべしと斷定せるべきもの

聖教量 先哲の聖教に基きて證明せるもの

此三量の中前の二は人智の範圍に於いて首肯せらるべき程度のものであるが、聖教量に至つては必しも人智の及ぶ處と言へないことがある。さうすると其先哲の教を信するもの同志の間には有効であるが、信ぜざるものには效力が無い。釋尊の金言は佛教徒には力があるが、基督教徒には及ばない、基督の言は佛教徒には何の證明と爲らない、故に聖教量

は其教を信奉するもの、間に限つて效力あるものと爲る譯である。今佛教徒としては、現量比量は申すまでも無いことであるが、聖教量として佛の所説の一切經を其依據とするのである。一切經の中に小大權實本迹の區別があるから、其區別を明確にして其依據を定めねば相成らぬのであります。日蓮主義者が佛説を輕んずるの風あるは古來からの弊風と見へて顯本法華宗の開祖日什正師は經卷相承を以て一宗分派の理由として居られます。日什正師は御年六十七歳にして天台宗より日蓮主義に歸伏せられた、眞の求道者である。當時日蓮門下の各本山を訪問せられたが、各自互に付弟嫡弟の系統争計をして居て、肝心の教義はそつち除けの状態であつた、それが日蓮聖人滅後約百年である、そこで日什正師は止むなく、法華經と日蓮聖人の遺文とを師匠と仰いで日蓮聖人の直弟と爲ると仰せられたのであります。此經卷相承の大義は爾來五百年間其光輝の爲めに教義の紛亂を防いだことは多大の事と存じます。現代に於いて半可通の日蓮主義者が簇出

の際益々必要の主張と存じます。彌本論に立戻りまして聖人教義の依據を本經に求めてお祈を致します。聖人の御教義は法華經全部開結合せて十卷が其依據であると申して宜いのであります。然しそれは廣過ぎて分りにくい故に今左の要文を擧げて其大要をお断致します。左の各文は至極簡明に其要領を得て居るからであります。

- 一 無量義經十功德品 來至住の三義の文
- 二 法華經方便品 如來興世の文
- 三 法華經如來壽量品 眞醫病子の譬喩の文
- 四 觀音普賢菩薩行法經 歸依三寶の法式の文

これより以上の各文に就いてお断を致します。

一 無量義經十功德品の來至住の三義の全文は左の如くである。

善男子 ①是の經は本諸佛の室宅の中より來り。②去つて一切衆生の發菩提心に至り。③諸の菩薩の所行の處に住す。

(續前法華經二九頁)

此文の中室宅とは法華經法師品の中に「大慈悲を室と爲す」と言ふ文があります。から第一段は是の經の根本は諸佛の大慈悲心より發作し來るものなることを明したのて、前節に申し上げた教門に當るのである、其慈悲は何に向つて發作せらるゝかと云ふに、第二段に一切衆生の發菩提心に至ると云は其發作の處を云ふたのであります。佛陀の大慈悲は一切衆生をして菩提心を發さしむべく働きかける、其活動の發現して來た處を凡て教門と稱する。

釋尊の制擧 發菩提心

圖示すれば右の様であるが前節と對照して頂きたい、第三段の「諸の菩薩所行の處に住す」は觀門を總括して所行の處と言ふたので、第二段に一切衆生と云ふも此に菩薩と云ふも同體である、第二段の場合には未發心のものなるが故に一切衆生と云ひ、此段では已に發心せるものなるが故に菩薩と敬稱したのである、已に所行の修行があるが故に當然の結果として得益は顯はるゝ、此文には得益を擧げて

は居らぬが、此文に引續いて十功德を説いて分満の得益を示したのには此意味を顯はして居るのである、此を圖示すると

十功德↑所行の處↑一切衆生の發心である即ち觀門の全體を言顯して居る、文字は簡單であるが、來至住の三字の中に觀二門の全體を説明し盡して居るのである。

に嘯をする、壽量品に云く 譬へは 一 良醫の智慧聰達にして、明かに方藥に練し善く衆病を治す、二 其人諸の子息多し、若し十、二十、乃至百數なり、三 諸の子後に他の毒藥を飲み藥發し悶亂して地に宛轉す、四 遙かに其父を見て皆大に歡喜し拜跪問訊すらく善く安穩に歸り給へり我等愚痴にして誤つて毒藥を服せり願くば救療せられて更に壽命を賜へ、五 父子等の苦惱せるを見て諸の經方に依つて好き藥草の色香好き味皆悉く具足せるを求めて搗き糝ひ和合して子に與へて服さしむ、六 諸子の中に心を失はざるものは即便ち之を服するに病盡く除り愈ぬ、七 餘の心を失へる者は其藥を與ふるに肯て服せず毒氣深く入つて本心を失へるが故に、八 父は念を作さく我今方便を設けて此藥を服せしむべし、即ち云く、我今衰老して死の時至りぬ是好き良藥は今留めて此に在く汝取つて服すべし癒じと憂ふること勿れ、九 是教を爲し已つて他國に至り使を遣して還つて告ぐ汝が父已に死しぬと、十

子等父背喪せりと聞いて心大に憂惱し常に悲感を懷いて心遂に醒悟し、此藥の色香味の美きことを知つて即ち取て服するに毒の病皆癒ゆ、其父子の悉く既に癒ゆることを得つと聞て歸り來つて成く之に見えんが如し、(續別法華經第三三六頁)

- 一 良醫：父……本佛釋尊……佛寶
- 二 子息十、二十、百數：無數億の衆生
- 三 飲他毒藥……邪法邪師を信ず
- 四 遙見其父……本佛の出世に遇ふ
- 五 良藥……本佛の説法、法寶
- 六 不失心者……善不失者
- 七 在在衆生……善善者、末世衆生
- 八 良醫の死……本佛の非滅現滅
- 九 遣使還告……四依の菩薩、僧寶
- 十 心遂醒悟……衆生の發心
- 十一 即取服之……衆生の修行

毒病皆癒……衆生の得益 之から本文に就いて嘯を致しますが先づ第一に宇宙觀並に人心觀として父と子、良醫と病子との二つに大別して見て居る處に注意を要する、文の 一 一 は父子との關係を説いて人身觀の妙處を發揮し、二 二 は良醫と毒藥を飲める子等を説いて、宇宙の迷悟對立の状態を説明した、父子の關係は天然の關係であつて人為的、如何とも爲し難きものであるが、吾人と佛陀との關係は先天的に深大なる因縁を有して父子の如き關係を有するものである、子は父の跡を相續すべき權利を有する、吾人は先天的に佛陀の御跡を相續すべき權利を有するものなることを明した、而も今は毒を飲んで迷へるが故に、父の跡を相續する力は無い、狂子は父の跡取にはなれないのである、この父子に救護の必要があり、信仰の問題が起るのである、父子の關係は必然的關係で、基礎的問題として、父子は一體なり此の不二的理論を明したのである、而も其

子が毒藥を飲んで苦悶しつゝあるの状態に對して之を救濟せんとするは、精神的問題信仰の問題として救濟者と被救濟者と迷悟其立場を異にする差別的方面の而二的事實を明したのである、此不二の平等無差別の本體と而二の差別的の相とが吾人に兩面あることを徹底的に説明して發展向上の前途ありと云ふことを明確にしたのが本段の意義である、これが佛敎人生觀の諸宗教のそれに勝れたる所以で日蓮主義の佛敎諸宗中に卓越せる原由である。

のであつて、良醫たる佛陀を起點として一切の關係を説明して居ることは、佛陀が宇宙の本主であり起點であつて、一切衆生は本佛釋尊を中心としたる、一大集團であり、一大家族であること云ふことを譬へたのである、此點は日蓮主義の特に大切な點である、且つ此點は日蓮主義が我國體と一致すべき宗教であること云ふ點も此處に存する、今や我國思想界に民主主義と云ふ様な思はずしき思想の勃興を爲しつゝあるの際特に日蓮主義が此惡思想を打破すべき任務を有して居ることは全く根本思想に於て彼等と相容れざるが故である、日蓮主義者にして自己が主義に忠實ならば奮闘して彼等の惡思想を打破すべきである。

聞法と思惟

(六) 信解と信仰

法學博士 山田 三三 良

然らば其思惟すると云ふことはどう云

ふ事であるか、日蓮聖人は又それに就て如何なる事をお説きになつて居るか云ふことを、御妙判に依つて拜讀いたしま

一デーハるたり贈りよ人夫カーベに罰子岡清者選歌和誌本
りな記手の人夫はるあに條下、眞寫るたし影攝に共と翁



聞法と思惟

すると、皆様御承知のやうに、人は眼に法華經を讀むと云ふことはあるけれども心には讀まないといふことを仰せられて居ります。法を聞いてそれを其儘にして置くといふことは、即ち心に法を讀まない者であります。心に讀まないものでありますれば、如何にして之を其の行いに

致すことが出来ませうか。唯聞いて有難いと云ふだけで、發心して覺を開くことが出来ませうか、所が世間にはさう云ふ事を言ふ人も随分あります。日蓮聖人の教は何でも熱烈である、不惜身命である命を先づ第一に無くして行くのであると云ふやうな事を言ふ人がある、時々さう

云ふことを私共も目撃するのであります。併ながら自分の家業も何も打やつてしまつてどうするのであるか、若しも家業を打つれば家は亡びてしまふのであります。個人の家が亡びれば則ち國は亡びるのであります。國が亡びて如何にして佛敎が榮えることが出来ませうか、國が亡びて法は榮えることは出来ぬと云ふことは、日蓮聖人も仰せになつて居ります。然るにさう云ふ風に間違つた信仰を有つて居る人がある、斯う云ふ人が信解なき熱心である、理解なき信仰である、所謂誤りたる動機に於て信心をするので、其志は實に尊きものであります。其方法手段を全く誤つて居ると云ふことになりませう。日蓮聖人は法華色讀——即ち眼に讀むばかりでなく、之を心に讀まなければならぬと仰せられて居ります。聖人は信解二法を全うせられたる事が尊いと謂はれて居りますが、其目的の最初の所は何であるかと云へば、法華の色讀、如説修行に在ると云ふこととあります。日蓮聖人の如説修行と云ふことは、二十年、三十年の間よくよく考へて然る

後に生れたのであります。吾々が其の跡に附いて段々進むに致しましたも、唯妄りに聖人の御言葉であるからと云つて、發心する譯にはいかなう。吾々には各々多少なりとも智慧と云ふものが興へられて居ります。吾が智慧に於て満足しないものを如何にして信仰が出来てありませうか、吾が有つて居る所の智慧を無視しまして、尊き人の教であるから盲從しなければならぬと言ふならば、それは信仰にあらざる迷信であります。日蓮聖人は迷信と云ふやうな事は少しも説きになつて居るのではありません。又佛に於きましてはさうであります。お釋迦様は決して迷信を人に勧めると云ふことはなさらない。大覺世尊は吾々一切衆生に放任せられまして、吾々一切衆生が自ら目を醒まして、自ら之に隨喜渴仰して來ることをお待ちになつて居るのであります。其自ら目を醒まし、隨喜渴仰するのは、吾が心、吾が智慧を以て理解しなければ到底出来ない、さうしてそれは即ち思惟と云ふことをしなければ出来ないこととあります。唯單に法を聞いて頭から

受け入れるだけでは出来ない事でありませう。
(七)一切衆生と佛生
吾々一切衆生には悉く佛性ありと云ふやうな事は今まで度々承はつて居りますが、併し殘念なことには未だ其意味が能く分らないのであります。諸君には皆能くお分りになつて居るか存じませぬが私には能く分らないのであります。のみならず此一切衆生に佛性ありと云ふとはどんな意味で自分等に佛性があるのであるかと云ふことも、實は痛切に考へた事も餘り無かつたのであります。然るに或る時に不圖した事から經文を拜讀しまして、吾れながら深く省みまして、此自分の不束なる弱き所の身の中にも尊き佛性がある、やがては佛と同じく佛になり得る——佛と少しも其品質を異にしなす所の尊き玉が我に在る、斯う云ふ事を佛に依つて保證せられて居ることを、今更の如くに耳新しく目新しく感じました時には、非常に自分ながら愉快に思ひました。我は詰らないものであるけれども

左は客年臘月統一閣に於て催せるハーデー翁の招待講演會後同翁より本誌松尾記者に贈りたる即席の一詩

May the two flags of our country fly side by side to carry freedom to every humble home from the Pacific to the Arctic you
Feb 27, 1917
Capt. W. H. Herald

鹿幾くは兩國の二つの旗が共に赤道帯より極地までしづの家にも馳れ自由を送る旗として
(小西登三郎)

我が身中の、何處かに内蔵する所の佛性と云ふものはやがて是が開発いたしましたならば、釋迦牟尼佛其方と同じものなるべきものであると云ふ事を考へますと、第一に我が身の甚だ貴重なることを思ひます。此身は洵に大切なものでありまして、享け難き人身を享けて此世に生れ出て居ると云ふことは、實に千載一遇の好機である。此時機に於て私の向上發展を圖り、我が佛性を開發し、我が佛性と云ふものを佛の重宝如くに目を醒ますと云ふことに努めなければならぬ。此時機に於て誤つて餓鬼畜生の如き、修羅界の如きに墮落しました時には、何時復た人間界に來ることが出来るかも知れない、斯う考へますと云ふと、今更ながら是まで承はつて居つた所の佛性が我に在ると云ふ事が如何にも尊く有難き事になつて來るのであります。併し尙ほ其佛性が果して在るのであるか或は無いのであるかそれは佛様の御言葉ではあるが、さう云ふものが有るのであらうか、無いのではなからうか、斯う云ふ事も感ずることがあるのであります、是は如何に

も我が身は小さいものでありますけれども、體氣ながら佛の性に似通つたやうなものが有ると云ふことを、吾々人間は實驗することが度々あらうと思ふのであります。

(八)佛性存在の覺知

第一佛性はどんなものであるかと申しますると、佛性とは大慈大悲でありますさう云ふものを佛と名けるのでありますさうして見ると我は佛の如き心を有つて居ると云ふ事が分ります、佛が有つて居るやうに有つて居ないが、併ながら佛心は有つて居る、孟子も申しました如く怵惕惻隱の心は誰も皆有つて居るのであります。又吾々人間のみならず、禽獸草木に至るまで其心はある例へば鳥獸の如きても自分の子や自分の身を憐れみ慈しんで居りますから、さう云ふものまでも此慈悲心を或る程度に於て有つて居ることが分ります。又吾々とはどんな場合でも善と惡と何方が好いかと云へば、何人も善の方に手を擧げるのであります、勿論惡を好む者はありませぬ、假令惡心を

而して斯の如くに一切衆生に佛性があつて、其佛性を開發し開發して行つたならば、遂にやがて佛となると云ふ尊き教は世界の宗教の中に於きまして如何なる宗教が之を説いて居るのでありませうか、即ち我が日蓮聖人の教を除いて外には無いのであります、基督教に於ても神と人間とは分類が違つて居つて人間が神になることは許されて居りませぬ、又其他の佛敎でも、女人は罪障があるから佛になる事は出来ないといふのであります。然るに日蓮聖人の教に於きましては一切衆生の佛性が開顯せられ、開發せられたものが如來であると云ふのでありますから、人間が佛様になると云ふことを明かに知られて居るのであります。斯く考へて見ますと、是ほど偉大なる教と云ふものは今日まで未だ聞き及ばざる所でありまして、どんな世界中の宗教と比較しまして

も、此法華經壽量品に謂ふてあります、無數億の衆生を教化して佛道に入らしむ、此尊き教と云ふものを思ひますと云ふと吾々の様な鈍根の者でありまして、どうも是はじつとして居られないと云ふ心が現はれて來るのであります。而して此の佛を見たとすつらんが爲に能く自ら信仰しまして、所謂「一心欲見佛不借身命」でなければなりません。然るに世の中には色々の信念があります、僅かな財産を貰ひたい爲に佛を念じ、或は肉體の病氣を治し、命を延ばして行きたい爲に、一生懸命に佛に祈つて居る者があります、是は勿論惡い事ではありませぬけれども、併ながら此大法と云ふものはさう云ふ僅かな詰らない祈禱の爲に存在して居るのではないのであります、佛と成らんが爲め、佛を見たとすつらんが爲め

有つて居る者、惡事を爲す者でも、其惡い事をする手段方法が惡であるのみならず、又其目的が惡である場合に於きましても尙ほ其人の有つて居る惡心が惡を爲すに至つた所の根柢に於きましては、善と云ふものがやはり根柢であることは明かであります。泥棒や人殺しても、其する事は惡であるが、さう云ふ罪惡を犯さざるを得ない事になつた根柢は、其人間が有つて居る本能的の善に向ひたい爲に手段方法を誤つて惡に陥つて居るのであります。さうして見ますれば、どんな罪惡の中にも善があるものであつて、絶對の惡ではない、完全なものであつて絶對に不完全なものではないと謂はなければならぬのであります、其善の極致なる所、其完全の極致なる所、其絶對なる所、それが即ち如來であります、佛でありますさうしてそれと同じ性質を吾々が有つて居ると云ふのでありますから、我が佛性は茲に初めて吾々に在ることを信じなくてはならないやうになるのであります

(九)迷信と正信

和歌題「海邊松」

子爵 清岡長言選

○天 東京雜司谷 矢野 浪子

○地 下谷區中根岸 小柳 英夫

○人 大阪市南 南 峰子

○佳 作 打よする浪のつみみにいその松

○松の葉のみとりにかけてさく花と見えしはな

○海士の子か波打つ岸の松か枝御旗を立てて

○色かへぬ姿をなみにうつしつたち榮にけり

○いそ時のしめゆふ松や入舟のしるしとなりて

○小ゆるきのいそふく風を友としてまつは千と

○をきかきくならしたる舟歌のしらへにか

よふ磯の松原 (十三歳) 小柳殿之允

海邊松

子爵清岡長言選

佛の意思に適ひ奉らんが爲に祈禱がある
のであります。然らざれば吾々が祈禱を
なしても、何處に尊い信念があるのでは
りませうか、即ち此己の佛性と云ふもの
をば、本佛の大慈大悲に依つて開發いたし
まして、此憐れなる自己と云ふものをモ
ット大なる自己となし、有限である所の
人間の生活に無限の力を與へる——言ひ
換へれば人間でありながら人間以上のも
のになつて見たいと云ふ所に信念がある
のであります。人間が人間で留まつて居
つて、僅かな小慾に捉はれて、財産が得
たいとか、生命を延ばしたいとか、さう
云ふやうな事を佛に祈つて居ると云ふの

機微譚語

山根青村

四七、緊禪一番

祇園南海は紀伊藩の儒臣なり、名は瑜
字は白玉通稱與一、木下順庵に學びて
最も時に長し、又書畫を善くす、享保年
間盛名一世を蓋ふ。南海少時甚だ圍碁を

嗜み、曾て友人と鳥鷲を闘はして與適
に旺んるに際し、窓外邊かに聲あり小
兒啼に墜つと、叫喚救を人に求む、此
時南海碁子を盤面に下さんと一考し
叫聲を聞くの後下し畢りて救ひに赴けば
兒子既に溺れて復蘇息の術なし。南海以

爲らく若し碁を圍まらずして閑坐せしなら
ば、直ちに起ちて、救ひに赴くべく、隣
人の兒子死せざるべし、兒子溝に墜つ
と聞き尙ほ一碁を下すに忍べるは不仁の
極にして、之が爲に兒子の死を救ひ得ざ
りしは、萬悔も及ばざる所なりと、是より
深く圍碁の害を覺り、終身復盤面に對
せざりしと云ふ。(續行錄)

の殺つぶし、驅遣し擧處すべきなり、何
の遠慮容赦があらん。さて一年の計は
一月にありとかや、屠蘇の醒め餅腹の
すく今日此頃、緊張せる氣分もて、日蓮
が弟子檀那たるの本分に反省自覺して、
大に奮勵努力すべきなり、一碁を下す
の間に隣人の兒は可惜死し畢りぬ、一遊
戯に手間どる間にしや人の子は邪教に
走りつゝあるを記憶せよ、遅くとも此處
らて一つ積皮禪を緊め直して掛るべき也
喝。

聖語、徒らに遊戯雜談のみして明し暮
さん者は法師の皮を着たる畜生也。
(松野殿御返事)

四八、一語千金

その昔、タータルの一侯に何某と云へ
る君あり、一日侍臣を從へて遊獵しける
に途中にて一人の僧の聲高らかに「若し
千貫の金を吾に與ふる者あらば吾れ其人
に善言を訓ふべし」と呼はり、街上を
趨り行くを見たり、侯は其僧の狀を視る
に、如何にも思慮ありげなる者なりけれ
ば、之を聴かま欲しく思はれ、即ち從者

○序列なし

- うちよする男波女波やまねくらむ巖にひきく
垂れし松か枝 淺草區 山根 日東
- 打よする浪の響きにきそひつゝ千代をこぼ
く松風の聲 越前 秋葉 純一
- わたつみの浪も静かに打よせて磯邊に高く松
ぞそひゆる 同 秋葉 日敬
- うら／＼のとけき春の磯風に君か千歳をよ
はる松か枝 同 秋葉 春淨

- しほかせを千歳しのきし色見えて名もたかさ
この浦の老松 千葉縣 福島 正之
- 海原をいつる朝日も長閑にて松は千とせの色
そ込めける 備前 原田 日男
- あら浪のさかまきよする巖の上にさゆるきも
なく松は生ひけり 淺草區 徳崎 芳子
- 沙風に吹れなからも年を経てふりおもしるき
浦の松か枝 大阪 大内 しげ
- 波風も治まる御代のためしとて海邊の松のお
と静かなり 常陸 窪田 純榮
- 大君の御代長濱の松か枝に千代よふ田嶋のこ
よきこゆなり 下總 星野 聖祐
- 浦の松幾世ねらん打よする波にみとりの色
をぬらして 青森 宮田 實
- 千代やちよ幾代かはらぬ磯の松とよ風は
よしあらくとも 千葉縣 小川 藏司
- いや高き富士の御山をあふくかな千代を響く
三保のうら松 同 春日よし子
- 治まれる御代を響くはまの松の千代の色そ猶
まさりける 同 林 五し子
- 濱風にもまれ来ぬらん老松もこの日はかりは
枝もならさず 安齋 横山甚之助
- 播磨海風ふき来れば濱松の枝より響の音そか
なづる 同 入江 善平
- 神代より種や生ひけん住吉の浦の松か枝色も
かはらす 千葉縣 成島 龍北
- 海きはの松に匂へる初日影さかまく御代の色
そみえける 日本橋 芥川 泰雄

に命じて千貫の金を與へしめたり、其時彼僧は先づ其金を受け收め、最も重々しく容を改め成儀を正し、さも尊とげなる

るに「凡て事を爲さんとせば宜しく其結果の如何を熟慮すべし」云々の語あり、

安國、四海妙法に歸せよと、其名を日蓮と云ひ其説く所は王佛一如の憲教なり。

年國民漸く覺め來りて、日蓮主義に接近し來れるもの候出、卿等が祖先の罪障消滅は卿等の義務なり、慶すべきなり、

日蓮主義とニコク

成島 龍北

大正七年一月元旦千葉縣山武郡東金町片岡清助氏宅に於る一日會講演の概要

諸君の希望によりて、此一日會に於て本題を講ずるといふては、誠ににこの

月元旦と相成りました、而して世は泰平の酒に酔て都鄙を問はず、到底、賀客は大

日蓮主義とニコク

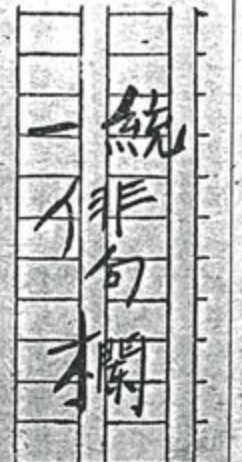
- 初日影いまさしそひて清見濁きくに清き松
○仇浪のあらき岩はに根をしめすまつの操そか
○浪風もしつけき御代に千よをへてふりおもし

○ 選者
よる波を千歳の友とあらいその
いはほにたてる松ををしさ

二月號「餘寒」

- ▲天位には選者の短冊を呈す
御受取の上は其旨御一報を乞ふ。
▲べ切月末迄に着す事

投稿所
東京市小石川區白山前 統一編輯所



○福壽草

一月の題の選みが悪るかたせいか、平素立派な名句をなされる人にすら餘り良好のものを見受けなかつた、

神戸石原擴氏より送られたる書翰 中の一節 (六年十一月二十三日付)

神戸吉岡正太郎

拜啓小生知人前記石原氏は貿易業務に農商務省囑託に依り數々海外を旅行し最近には今秋歸朝せられ右書翰の通り書信に接し候次第に付御報申上候邊て法華經の純信者たらん爲努力致度御氣付の方法何卒御報示玉り度御依願申上候 勿々(記者宛)

孚インスピレーションより見ても「精神」の世に存在するを否定すべからずと辯じ立てたるに聴衆中に賛成者續出し小生も多少面目を施し申候と同時に Nishitani, The Great God of Japan 日蓮上人の名前丈にても彼等の耳に記憶せしめたるは小生の近頃愉快に感ずる處に御座候とは云へ小生は未だ法華信者たる能はず唯だ上人を渴仰するのみ宗教としては小生は法華よりも寧ろ泰西の一神教に傾き居候先覺者たる貴君の御教導を待つ

●自慶會の創立

自慶會は左の諸氏にて發起されれば會則も併せて掲出す

(別項論文參照あれ趣意書其所に出づ)

自慶會創立者 (イロハ順)

造船大監 岩野直英
大僧正 本多日生

陸軍少將 小原正恒
陸軍中將 高橋義章
前大審院檢事 矢野茂
法學博士 山田三良
海軍少將 松本有信
造船大監 福田馬之助
文學士 小林一郎
海軍中將 佐藤鐵太郎

自慶會々則

- 第一章 名稱
第一條 本會ハ自慶會ト稱ス
- 第二章 目的
第二條 本會ハ其目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ
一、東京市ニ於テ毎月二回以上労働者ノ慰安修養會ヲ開催ス
二、各地ニ於テモ適宜ニ労働者ノ慰安修養會ヲ開催スルコトアルベシ
三、工場其他團體ヨリノ希望ニ應ジテ慰安修養會ノ講師及ビ演藝者ヲ派遣シ希望者ノ便宜ヲ圖ル
四、労働者ノ慰安修養會ニ關シテ時々有識者経験者ノ會合ヲ催シ其方法及ビ主旨ニ就テ講究ヲ爲ス
五、上流者資産家ナシテ健全ナル文明ヲ擁護スベキ責任ヲ自覺セシムル主旨ニ於テ講演會ヲ開催スルコトアルベシ
六、労働者ニシテ職業ニ勤勉シ品性高ク思想健全ニシテ特ニ他ノ模範タル者ニハ本會ニ於テ之ヲ表彰スルコトアルベシ
七、本會ノ目的ヲ達スル爲ニ簡短ナル印刷物又ハ冊子ヲ發刊スルコトアルベシ
八、本會ノ發達ニ伴フテ講習會ヲ開キ労働者ノ慰安ト善導トニ必須ナル智識技能ヲ教授スルコトアルベシ
九、毎年一回會員ノ總會ヲ開ク
十、其他本會ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事項ハ評議員會ノ同意ヲ經テ之ヲ行フコトアルベシ
- 第三章 事務所
第三條 本會ノ事務所ヲ處理スル爲メ本部ヲ東京ニ支部ヲ適宜ノ地ニ設ク
- 第四章 理事ノ部
第四條 本會ハ理事會ニ於テ之ヲ決定シ支部則ノ制定及ビ事務ハ本部ノ指揮ニ屬スルモノトス
- 第五章 會員

第五條 本會會員ヲ左ノ四種ニ分ツ

- 一、名譽會員 本會ト事業ヲ贊助スル學識名望高キ人又ハ特ニ本會ノ爲メ功勞アル人
- 二、特別會員 本會ノ爲ニ一時金壹拾圓以上又ハ十年間毎年壹圓以上ヲ寄附スル人
- 三、正會員 本會ノ爲ニ一時金拾圓以上又ハ十年間毎年壹圓以上ヲ寄附スル人
- 四、通常會員 本會ノ爲ニ一時金五圓以上又ハ十年間毎年五拾錢以上ヲ寄附スル人
- 第六條 本會會員タルトスル者ハ住所氏名ヲ明記シ本部又ハ支部ヘ申込マルベシ
- 第七條 本會會員ニハ本會ノ徽章ヲ交付ス
- 第八條 本會ノ目的名譽ヲ毀損スルコトアリタル時ハ理事會ニ於テ之ヲ除名シ且ツ徽章ノ返還ヲ求ム
- 第九條 本會會員ハ本會ノ慰安講演會ニ無料ヲ以テ入場スルヲ得又刊行物ノ配布若クハ減額購讀ヲ得ルモノトス

第六章 役員

- 第十條 本會ニ左ノ役員ヲ設ク
理事長 一名
理事 七名
監事 三名
評議員 十五名以上
- 第十一條 理事長ハ理事ノ互選ヲ以テ之ヲ定メ一切ノ會務ヲ總理ス
- 第十二條 理事及ビ監事ハ會員總會ニ於テ之ヲ選定シ各任期ヲ二ヶ年トス理事ハ常務ヲ處理シ監事ハ會務ヲ監督ス
- 第十三條 但シ創立最初ノ理事及ビ監事ハ創立者ニ於テ選定ス
- 第十四條 評議員ハ理事監事ノ協議ニ依リ推薦シ任期ハ二ヶ年トス
- 第十五條 但シ創立最初ノ評議員ハ創立者ニ於テ推薦ス
- 第十六條 評議員會ハ理事長之ヲ招集シ重要ナル會務ヲ處理ス

議決ス議事ハ過半数出席スルニアラザレバ議決スルヲ得ズ
理事監事ハ共ニ議事ヲ列シ議決ニ加ハルヲ得
第十五條 顧問ハ理事會ノ決議ニ依リ推薦シ任期ヲ定メズ
顧問ハ本會ノ事業ヲ指導ス
顧問ハ評議員會ニ對シ意見ヲ開陳スルモ議決ニ加ハラズ
第十六條 役員ハ名譽職トス
第十七條 本會ノ總會ハ毎年之ヲ開催シ報告ト議事ヲ爲シ且ツ懇親ヲ圖リ又講演ヲ行フ
第十八條 本會ノ收入ハ寄附金其他ノ雑收入ニシテ支出ハ理事會ノ決議ヲ經タルモノニ限ル
第十九條 本會會計ニ關スル責任ハ理事ノ職務トス

第二十条 本會ハ道テ社団法人ノ認可ヲ受クルモノトス
第二十一条 本會會則ニ規定ナキモ必要ナル事務ハ理事會ノ決議ニ付シ之ヲ處理ス

東京市淺草區北清島町拾四番地(統一閣内)
自慶會 本部
電話下谷六三〇番

名譽會員ノ部 (次號不順)

陸軍大將 大迫 尙道
政友會總務 床次竹二郎
醫學博士 片山 國嘉
造船大監 種子右八郎
三井銀行專務 早川千吉郎

理事ノ部

前大審院檢事 矢野茂
陸軍少將 小原正恒
安川繁種

子爵 今村 繁三
海軍少將 加藤 高明
海軍大將 木村 剛一
海軍中將 藤井 較一
海軍中將 八代 六郎
大審院長 横田 國臣
檢事總長 平沼 騏一郎
陸軍大將 井口 省吾
陸軍大將 一戸 兵衛
京都府知事 木内 重四郎
男爵 坂谷 芳郎
海軍少將 森 越太郎
海軍中將 岡田 啓介
海軍大將 齋藤 實
法學博士 志田 仰太郎
海軍中將 財部 彪
海軍中將 岩村 俊武
主計總監 成岡 滿俊
大關保險專務 加藤 八太郎
文學博士 清水 文之輔
上宮學會長 高島 平三郎
海軍中將 服部 宇三吉
河瀬 秀治
石橋 甫

- 海軍少將 市原卯之助
 僧正 井村日威
 造船大監 岩野直英
 監事ノ部 安井正太郎

- 海軍中將 佐藤鐵太郎
 法學博士 山田三良
 大僧正 本多日生

- 評議員ノ部
 海軍中將 宮岡直記
 陸軍中將 高橋義章
 大審院檢察 林頼三郎
 醫學博士 片山國嘉
 陸軍少將 伊豆凡夫
 造船總監 福田馬之助
 文學博士 瀧澤吉三郎
 鐵道管理課々長 姉崎正治郎
 東京市養育院主事 永井亨治郎
 海軍少將 安達忠信
 權大僧正 松本有憲
 文學士 野口日信
 陸軍少將 小堀一太郎
 小關三俊
 永島巖平

尙左の議案を附議したり
 一、名譽會員の回答を求め来る十五日頃に一且名簿を印刷し一般の會員募集は郵便にて發送すること

二、評議員理事監事の會合を二月上旬に催す事
 三、藝人との連絡の爲め設立者に於て二月上旬に之を招くこと
 四、二月中旬創立大會を開くこと其方法大體如何
 五、事務の實際は理事に引續くこと

統一閣新年會

統一閣に於ては一月六日午前十時新年國禱會を催し、先づ總裁本多現下大導師の下に法要を執行、屠蘇の儀式終りて現下は新年の辭を述べられ(別項筆記参照)亞て各會代表者の謝辭あり、第一に講妙會代表として小原正恒將軍の辭あり、次に統一閣讚助會代表として高橋卯三郎氏、次に青年會代表として窪田貞二氏、次に品川正法護持會代表淺尾清造氏、次に身讀會代表猪又金太郎氏、次に參聽者代表大原亮氏次に統一閣代表山田豐次郎氏、次に東京妙道會代表小島傳平氏順次總裁並に各講師に對し感謝を表し、次に佐藤將軍は立つて自慶會の趣意を述べられ、法餐配布の上、各自會員の所感に移り各々胸中の法義滋味に樂めるを披瀝し目出度解散したり。

宗務廳年賀式

五日午前十時例年の如く品川宗務廳に於て年賀式を執行本多管長接見の上一場の

栃木老師と婦人會

上越山武郡瑞穂村永田光昌寺の永田老師は、八十餘歳の高齡にも、はらばら、東奔西走して檀徒の接化に努めらるゝは、眞に青年者流の慚愧に堪へざる所なり、永田佛教師婦人會は老師熱誠の生む所にして既に會員百廿名を數へ創立已來講演會を開く事八回に及び去る十二月十四日秋期大講演會を光昌寺に開き、高見見龍、江見乾丈の二氏信行と修業に就て講演する尙同日役員の改選を行ひ前會長石渡とく氏に代りて新に川島く氏會長となり大に將來の發展を劃策すと云ふ、因に同地小學校校長田部篤四郎氏は朽木師を助けて會の爲に盡力せられたり云ふ

頻迎の會

客年十二月第二日曜日千葉縣山武郡大綱町蓮照寺に於て、大綱郵便局長岩佐春治氏は兒童會を組織し、頻迎の會と名附け第一回を同寺に開會し、小林一郎氏の作「日の出る國」の歌をオルガンに合せて百五十餘の兒童に誦せしめ、開會「秋山乾英氏」學行仙人、岩佐春治氏、勇猛精進、成島泰行氏のお伽話あり又參列者も澤山あり非常に盛會にて自今大に兒童教育の爲努力する由。

瑞穂通信

十二月二十八日山武郡瑞穂村駒込東榮寺にて例會開會。信仰の要路を高見見龍、受持法華名者編不可量の經文を如何にして實現し得べきやを廣部乾山の二氏講演する。

一月元旦

山武郡東金町片岡清助氏宅に於て午後三時より講演。開會堂亮雄、日蓮主義とこれ、成島龍北、報恩抄の一節竹内無著、新年と希望、山岡會俊、其他山岡勳一、松永會淳諸氏の隨喜講話あり、千賀縣としては元旦の講演は新レコードを作りもの也而して今や東金一日會は純信仰的團體として全町に亘り健全なるものとして發達の光明を認む。

秋期布教報告

十月十九日 中野本城寺にて講演、山形眞瑞、擔當布教師日暮玄靜の二師出席、聽衆七十人。國家安全水死横難道徳の法要を行へり
 十一月十二日 川上村吉藏寺にて開會海老瀬乾樹、

訓示あり終つて祝賀の清餐を享け解放。
 ●東京寺院有志年賀會
 三日午前十時、染井蓮華寺に於て年賀會あり、祝賀交換ありたり。

思恩教林四恩祭并に大講演會(妙經寺に於て)

淺草區妙經寺内思恩教林にては例年の通り四恩祭を行ひ大講演會を催したるが聽衆約八百餘の盛會にて、開會の辭松尾鼓城、四恩代議士村松恒一郎の二先生、年頭の感を海軍中將佐藤鐵太郎閣下、主師親三徳に於て海軍中將宮岡直記閣下、日本神國の位置及任務權大僧正野口日主現下、別に教辭を子爵石井菊次郎閣下、大僧正本多日生現下より賜り、之を野口會司布演して講を終り例により餘興數種、福引等ありて盛會なり其諸氏の講演は順次本紙上に掲出すべし。

各地教報

●萩教報 多年初會後邊師の開拓せる萩の教田は熱心なる紀野俊輝師赴任と共に益々教光を發輝すると共に、日蓮研讀會も新なる努力に依りて開展し、日蓮文庫の設立、研讀會の公開等企圖しつつあり、昨年納會の諸報は
 (幹事)世良監(學士) 野北砲兵少佐 紀野俊輝 日蓮主義者の覺悟
 ●大阪堂閻寺教報 十一日六日川口宅にて久遠本佛京義應、十二日堂開寺にて御會式法要を謹後左の講演をなす、報恩謝辭京義應、二十一日婦人會日蓮上人の信仰と吾等の信仰京義應、要慮すべき人心の傾向と日蓮主義川崎布教師、二十二日三軒家西崎宅にて田中、橋本に續て知恩笹川真玄、常住の理を

◎日蓮聖人の御事歴を詠じ奉る

△初轉法輪 熊澤優子
 師の君に背くに似れど説く道は
 之ぞまことの御佛の道
 み佛の只一筋の道なれど
 心の間に迷ふ諸人
 △父母濟度

けふよりは我子を法の親として
 妙の御弟子に入るぞ尊き

恭賀大正戊午之元旦

本多日生

人已去貪嗔瞋愚痴
譬如磨鏡意定乃能
有一心便有一天
下人民銅飛蟻動之類
坐自笑我(阿含正行)

恭賀新年 野口日雄
中村日錦
石川顯隆
三橋會要

賀正 今成日誓
笹川日日堂
井口善叔
飛山口日碩
金光孝碩

正賀 能仁日事
國友日事
松邊川泰洲
渡邊乾航
賀謹 松井道安

大正第七次新歲

成島泰行
土屋眞容
五十嵐吉正
前田日應
中山通辨
島田顯恕
中田通應
秋葉純一
墨照玄

謹賀大正戊午新年

關田日城
森川寬日
大津日玄
松本堅日
原田日英
川崎日照

謹賀大正七年

梅澤天純
酒井眞隆
池邊快整
小田竹俊
前田雄政
宮向日應

新正 岡本圓正
長谷川日濟
吉田義智
重智了

總本山 妙滿寺

萩原啓門
銀井乾升
金光孝碩
清水一乘
三好信道
熊井乾堂

謹賀新年 京都妙祐山久遠寺
坪永日監

謹賀新年 綜合大學林
阿部日正
今成日誓
關田日城
近藤日保
木村日保

謹賀新年 齋藤日章
小西日喜

千葉縣支學林
中村日錦
竹內無着
國分顯有
秋山乾英

統一閣 本多日生
井村日成
高木本順
松尾鼓城

恭賀新年 紀野俊耀
草切信榮
山田秀太郎
矢野聖顯

恭賀新年 自慶會
天晴會
大阪天晴會

恭賀新年 法華會
京都法華會

恭賀新年 第三教區青年布教團
竹內顯領
山田誠心
宇津木英心
秋分英心
國分英心
古口英心
倉本英心
山本英心
長岡英心
稻岡英心
河野英心
芹澤英心

謹賀新年 講妙會

(統一閣内)青年會
玉川由太郎
窪田貞二
高橋辰平
野島連平
增田一德
野間三德

謹賀新年 品川正法護持會

身讀會
伊藤德松
東畑兼吉
岩井庄三郎
宮澤種吉
田川金太郎
內田銀次郎
小林立太郎
猪又金太郎

謹賀新年 顯本宗學研究會
山名日宗

謹賀新年 在米國 開爲太郎

謹賀新年 影山謙二

謹賀新年 田久保日城

謹賀新年 青森地名會

統一節 宇都宮主計介
宇都宮太郎

謹賀新年 松本堅晴

賀正 東金町 山岡會俊

恭賀新年 武田顯龍

賀正 岡山市中之町 柿屋龜甲店
店主宇垣卯三郎

謹賀新年 田中關四郎

賀正 夏目智誓

賀新片岡盛助

新年の御慶目出度申納
上田智量

賀新 吉岡正太郎

賀正 早川屋旅館

賀正 思恩教林

賀正 中川日史

賀正 安川繁種

賀正 中村謙藏

賀正 林太喜一郎

賀正 森下馨

賀新 遠阪精華

謹賀新年 山根日東

謹賀新年 統一閣

恭賀新年 紀野俊耀

賀新 草切信榮

賀新 山田秀太郎

賀正 湧井吉太郎

賀正 大網婦人會

賀正 東京妙道會

賀正 大森妙道會

賀正 小西眞平
小西眞雄
小西憲三

謹賀新年 松田宏榮
安藤日莊
池澤日辰
石塚日潤
田島義潤
大須賀玄遊
森本憲章
笠原琢瑞
伊内保教精
石渡英哉

賀新 三上義徹

恭賀新年 矢野茂
山田三郎
山田三郎
大迫尙道
佐藤鐵太郎
山岡順太郎
清岡長言
小原正恒
小笠原長生
小笠原丁
小笠原靜
岩野直英

宮岡直記
小關三平
中山長明
小林一郎
木内重四郎
松本有信

日本橋區
坂本公園
新賀加能亭

謹賀新年
鹿兒島市
皇道青年會本部
菊地 武繼

謹賀新年
常陸太田新田
賀新窪田純榮
伯耆松崎本立寺住職
謹賀新年 朝倉俊達

謹賀新年
東京府小笠原島顯
本教會
擔當教師 吉塚通榮
不便の地に候へば年賀
禮缺ぎ申候

賀正 廣部永眞
賀正 堂亮雄
賀正 三浦傳三郎
統一編輯所内

恭賀新年
丹後國新舞鶴町
日宗寺住職
布目潮深

賀新
市瀬鷹之助
山中慶山
喪中年賀缺禮
名古屋市古渡町
靈山寺
有田宏道

一金五圓也
青山 刀自殿
安川 刀自殿
廣崎金十郎殿
相馬小馬三殿
品川 清造殿
淺尾 清造殿
一速記二時間也
身讀會殿
協田 堯惇殿
一金貳圓也
日本橋 窪田貞二殿
松本堅晴殿
右雜誌「統一」費用中へ
御寄贈相成此に謝意を
表候也
東京小石川白山前町
統一編輯所

日蓮各宗 寺院 御僧
法衣 草木 一直に御尋思下
京都 三條通鳥丸東入ル町
草木本店
電話 中七三三五
振替口座東一五五九番
東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話 下合三四三四番
振替口座東二四五六八番

みたから
毎月一回発行
一枚代二錢五厘
郵税なし
こんな月刊雑誌を二月から發行致します修養と
信仰と家庭とを兼て女にも子供にも讀め、併せ
て労働者諸君の良友となりたい目的でお眼にか
ゝるつもりです。尤も最初は新聞體四ページの
半ペラものですが、漸次八ページ位にするつも
りです差當り統一の讀者諸君へ御講讀を御願ひ
したいので御送り致します。御用なき御方は御
面倒でも其雜誌に不用の「附箋」をして御返し下
さるか（此場合は切手貼付に及ばず、又封紙を
改むれば五厘切手でよろし）又は葉書で一丁御
報らせ下さいませれば發送致しません。其他は
御購讀御承知のものとして統一代金御依頼の際
集金差上げますから宜敷御依頼致します。
統一編輯所内
みたから發行部

恭賀新年
念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
願本法華宗妙滿寺御用達
御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來
調進仕り候へば多少に不拘御用
命願上候
京都市寺町通蛸薬師下ル
念珠商 小野嘉助
電話 中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

改正定價並に廣告代價

一冊十錢。郵送分は別に五厘申受候
前金送金分に限り郵送料申受ず候
代金未済の方へは六ヶ月目乃至一ヶ年
目毎に御便利上集金郵便差上ます（但
此場合郵便局手数料五錢加算仕るべく
候）
故に郵便送り當方より集金のもは半
ヶ年六拾八錢、一ヶ年壹圓卅一錢申受
候但し一ヶ年讀者の方より前金御送金
は壹圓廿錢にて宜しく候
送金は振替貯金口座東京三三三三番
統一編輯所に御拂込を乞ふ（もよりの
郵便局にて御拂込のみ下され度、確實に
御座候小爲替は紛失のおそれ有ます
領收證は特に御請求以外は本誌上に表
として取纏め掲載します
廣告料は一頁特別十五圓、半頁八圓五
拾錢、三分一頁六圓、半頁八圓五
拾錢、五分一頁六圓、半頁八圓五
拾錢及び義務廣告は断り申候

御注意

多数中の事に付若し難読不配達の節は御一報を乞
ふ。早速御送本可仕候。多数の事に付計算相違
當方より其金郵便差上候節、多読の事に付計算相違
又下され度願上候。手送り候節は御面倒ながら御一
集金郵便差上候。何かの御都合にて御拒絶の方も
有之候。左様の節は其御放任なく葉書にて一寸其
旨御一報下され候へば、引續き御送本申上候。又御
拒絶の後は不用の節も一寸御一報下され度早速御
取消の事にて送本を中止仕るべく候。御返事仕
らぬ場合可有之候。往復はがきの以外は御返事仕
らぬ場合可有之候。往復はがきの以外に於
て最大多数の發行中に於ては、一が宗教雜誌界中に於
て最大多数の發行中に於ては、一が宗教雜誌界中に於

佛像佛具 調度所
位牌木証
宮殿幢天蓋一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙満寺
大本山本國寺
日宗各教團
京都寺町四條南大雲院前
辻井岩次郎
電話 大坂八一五七番
電話 下三二五八番
御用達

謹賀新年
抑も當藥王寺に於て師弟相續して數百年
秘傳の眼藥血の藥は寔に「是良好藥今留
在此一の經文の如く其効驗著しき爲め或
は布田目藥血の藥と稱して發賣するも此
等は皆偽物にして上總山武郡布田藥王寺
前住職中田日蓮の調製法を繼紹せる現住
職齋藤日章の名義外は拙寺の製藥に無之
候間此段謹告候也。千葉縣山武郡源村上
布田藥王寺住職齋藤日章の名有るは眞物
なり」
● 眼の藥
定價壹瓶（試用五錢）外拾錢、貳
拾錢、參拾錢、五拾錢
▲ 効能 ▼ たゞ目、かすみ目、ぼし目、
くも膜、ちみ、うち目、つかれ目、はや
り目、トラホーム等に効能あり
● 血の藥 定價（金五錢）
▲ 効能 ▼ 男女の道産前産後▲めまい
▲たちくらみ▲時候あたり▲氣絶▲のみ
すき▲酒毒▲食あたり▲風邪▲婦人病▲
貧血疾▲頭痛等
● 藥製藥本舗
千葉縣山武郡源村上布田
藥王寺住職 齋藤日章
振替口座東京第六七九一番

御注意
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙満寺
大本山本國寺
日宗各教團
京都寺町四條南大雲院前
辻井岩次郎
電話 大坂八一五七番
電話 下三二五八番
御用達

御注意
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙満寺
大本山本國寺
日宗各教團
京都寺町四條南大雲院前
辻井岩次郎
電話 大坂八一五七番
電話 下三二五八番
御用達

著師生日多本 正僧大

修養と日蓮主義

(來出版再)

本書 日蓮主義の主張を説き(二)社會問題と日蓮主義を論じ(三)修養と日蓮主義を論じ(四)日蓮聖人と女性を論じ(五)日蓮主義より見たる大涅槃經を論じ(六)日蓮聖人の信仰を明かにし(七)日蓮主義の使命を説き(八)日蓮主義の體道用道を述べ 滔々數萬言、所論嚴正、理義平明、說叙懇切、何人も一讀直ちに日蓮主義の秘奥を悟り、以て自己の修養に資する所あらむ。

三五判洋裝函入
紙數五百六十頁
正價九拾五錢
郵稅六錢

- 大藏經要義 全八冊 (第五卷 迄既刊) 正價各壹圓八拾錢 小包料各十二錢
- 法華經講義 全二冊 (三版) 正價各壹圓八拾錢 小包料各十二錢
- 日蓮主義 全一冊 (四版) 正價各九拾五錢 郵稅六錢

○四二京東座口替振
町本區橋本日市京東

館文博

天律と共のあらし日蓮上人の引教法
機微譚語。(四九)端座受槍。(五〇)約束嚴守

山根青村



(號六十七百二第)

- △日蓮聖人の御事歷奉詠……………熊澤優子
- △課題和歌發表……………子爵清岡長言
- △在米國本誌讀者から(通信)……………關島太郎
- △菩薩の再誕として……………窪田貞二
- △自慶會記事(協議會、發會式)……………
- △名古屋統一團支部發會式……………梅 淺草區慶印寺樓 松尾鼓城草一



日蓮聖人教義綱要 (第五回)
聞法と思惟

井村日成
山田三良
法學博士